



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



相撲観戦

中村 泰弘

1月14日(土)の午後、キンコーズ秋葉原店はプロと思しき人たちがごった返して、コピー機の前に陣取って会社の内輪話に興じながら印刷作業を進める集団がいて、その周りでコピー機が空くの待っている男性がしびれを切らして顧客に電話で状況を伝えたりして大変雑音のひどい環境だったが、当日ロシア人向けに配布する取組表や番付表を作成するためPCを持ち込んでテーブルの一角を借りて作業を始めた。

前日の晩までにしこ名や部屋名などをロシア文字対応にしたマスターテーブルは出来ていたが、顔写真の貼り付けなど手間のかかる編集が残っていたので、終わった時には4時を回っていた。ああ、もう幕内の取り組みが始まるよお・・・と焦りながらも駅に急ぎ、両国にたどり着いた。

すでにロシア人一行はいい感じで落ち着いて楽しんでいる様子であつたがとにかく配布物を受取ってもらおうと思い配り始めた。何人かが「スパーシーバ」「ありがと」と言って受取ってくれたが、へえという感じでちらっと見て折りたたんで仕舞いこむ人も多かった。他に誰か居ないかと探して目が合った隣のブロックの男性に話しかけながらチラシを渡しても怪訝な顔をされたので、「大使館の方ではないんですか?」とロシア語で聞くと「I don't know.」と困ったゼスチャーをされたのでロシア人ではなく別の団体だとわかった。

バタバタしながらも一応ひと仕事終わったので、自分も落ち着こうと思って入場券に書かれた席に行くところ赤ら顔のロシア人の男性がビールを飲みながら座っていた。座席の主間違いを指摘すると苦笑いしながら謝られ、大目にみて他の空いている椅子に私がしばらく座っていたが、後から入ってきた日本人のご婦人が困った顔で近づいてきたので、平謝りしながら彼女に席を明け渡す羽目になり、そうするとロシア人たちも席を詰めて私は元の席に収まった。席はブロックの端で、引率者におあつらえ向きの席だったので満足した。ブロックには20人位のロシア人がいたが他のブロックに「席替え」した人もいられるので実際の参加者数はわからない。また今回子供は少なかった。

ビールを飲んでいてロシア人男性は取組の度に奥さんと「次は右と左どちらが勝つと思う?俺は左だと思う」などと予想して会話を楽しんでいた。

また、よく尋ねられる懸賞金の旗について、今回もロシア人同士の

話で出てきていたが、ある人があれはреклама(広告)だよと言って周りはそれに納得していた。懸賞の訳語を思い出しながらそばで聞いていた私は、この解答はなかなかうまいと思った。

ロシア人たちは相撲の雰囲気に入るのを楽しんでいる様子だった。件のビールの男性はまだ結びの一番まで行かない内に満足した風で奥さんと帰って行った。

結びの一番は、新進気鋭の碧富士が出場力士最高位の貴景勝と組んだ注目の一戦だったが、格の違いは歴然で大関の胸を借りてぶつかっていく碧富士に貴景勝はびくともせず、双方離れて足を止め仁王立ちのまま固まった時に場内は大盛り上がりとなった。それから相手の突き出した腕を挟み込んだ貴景勝は碧富士の体もろともぶん投げ、その瞬間場内はうお〜といううなり声がまるで天井から降ってきたかのように響き渡った。最も土俵から遠い我々の席に居てもその響きは全ての観客が聞いたものと同じだったと思う。そしてこのような体験は誰にでも言葉を越えた強烈な印象を残すだろう。

帰り支度をしている時に、誰かが落とした紙を拾ってくれている人を日本人と思って礼を言うと私の真後ろに座っていたロシア人だった。その若者は大きなカメラを持ってきたが、流ちょうな日本語で私に今日の手配についての礼を言ってくれた。またもう一人の男性からも日本語で話しかけられ感激と感謝の言葉をもらった。

外に出ると、駅の周りでロシア語を話している集団を見かけたが、ひょっとして交流協会以外のロシア人や非ロシア人(ウクライナ人)なども観戦に来ていたのだろうかと思った。いずれにせよ、国技館はこれからも日口そして海外交流の拠点となりそうである。(常任理事)

お知らせ

●ロシア語の泉(5)

日時: 2023年2月26日, 3月5日, 3月19日(日) 13:30~16:00

会費: 一般8000円、会員7000(3回7.5時間)

場所: 田町「リーブラ」2階

講師: スニトコ・タチヤナ

●マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2023年2月25日(土) 13:30~15:30

会費: 3000円(教材込み)

場所: 田町「リーブラ」造形表現室

●マースレニツァ祭り

日時: 2023年2月24日(金) 18:00~20:00

会費: 1000円

場所: 田町「リーブラ」ホール

*「グローバス」共催

●ロシア語クラス生徒募集中!!

水曜初級1A-1(19:00~20:00) 1A-2(20:05~21:05)

土曜上級(10:00~11:30) 日曜ゼロからクラス(18:00~19:00) オンラインクラス月曜準中級(18:00~19:00)

*変更の場合もありますのでお問合わせください。

E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

亀田慶一郎氏、山岸ひさ子氏、内堀學氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org



生活困窮者へ食品等配布に「ロシア産そばの実」も 在日ロシア人女性が調理方法の実演と試食をすすめ栄養価の高さや素朴な味わいに関心を示す

日向寺 淳一

ロシア産そばの実（グレーチカ）の在庫が余り、フードバンク等に活用できないかとの相談を当協会常任理事の江本大輝氏から受けました。私自身が板橋区内のフードパントリー活動に関わっていることもあり、この関係者に提案して了解を得ることが出来ました。さっそく、江本氏を通じてJATM（ジャパン・エア・トラベル・マーケティング）より、たくさんのそばの実を超格安でゆずって頂きました。いっぽう、日本人にとって馴染みのある「ソバ」と違って、そばの実の食べ方をほとんど知られていないことに不安を抱きました。関係者からは「受け取ってもらえるのかな」との声もあり、そこで日本に暮らすロシア人女性に相談することにしました。すると横浜のレストランで働くヴァレーリアさんより、「私がそばの実料理を作るので、試食させてみては」との提案があり、会場の一角にコーナーを設けることになりました。

12月25日（日）、11時から板橋区内のフードパントリーが始まりました。板橋区内外から200人近い生活困窮者の方々が食料品等の受け取りに詰め掛けました。3分の2が女性で子ども連れも目立ちます。年齢も30代～40代が6割、70代以上の高齢者も増えています。



今回、江本氏も駆けつけ、ヴァレーリアさんをはじめ、在日のロシア人とその友人がボランティアとして参加して頂きました。会場では、食品等を一通り受け取ったあとの最後に「そばの実配布コーナー」があります。そこでロシア人女性らが調理方法の実演を行い、試食をすすめてそばの実を配布しました。来場者は、珍しい食材に最初は少し驚いていましたが、栄養価の高さ、素朴な味わいに関心し、（フライパン調理からの匂いも時に漂っていて）喜んで受け取られた方々が多くいました。子ども連れの方々には、ちょっとしたクリスマスプレゼントになったと思われました。（会場には「サンタクロース」が何人かいました）ヴァレーリアさんやロシア人女性からは、「ロシア産に違和感を示す人はいません。喜んで受け取ってくれました。私たちに

にとってつらい時期ですが、こころ暖まる交流が出来き、次回も参加します」と感想を述べました。今回、配りきれなかったそばの実は、次回2月26日（日）の配布会で、再び扱って頂けることになりました。（常任理事）

★留学生便り(50)★

エストニアのクリスマス

立岩 優里

エストニアでは、他のヨーロッパの国々と同様、12月のクリスマスに向けて街が明るく彩られます。首都タリンの中心に位置する旧市街では、11月の中旬になるとクリスマスの雰囲気漂います。旧市街の中で最も人が集まる大きな広場では、クリスマスマーケットが開かれます。11月はそれほど混雑していないのですが、クリスマス休暇が近づくにつれ海外からの観光客がとて増えるため、マーケットを中心にして賑わいが生まれます。その中心には10メートルを超える程の大きなツリーが飾られ、正面にはステージが設置されます。そこでは子供たちの聖歌や楽器の演奏が行われ、恍惚とした表情で聴き入ってしまうのです。その奥ではマーケットが開かれているため、様々なものに触れる機会があります。ホットワインを飲みながら、クリスマスオーナメントを物色したり、エストニア料理の「血のソーセージ」を試すなど。中には物珍しいものも売っているため、見ているだけでも楽しいかもしれません。

クリスマスシーズンのエストニアの特徴として、雪が沢山積もっているためホワイトクリスマスを体験できることでしょうか。（年によって積雪は違うそうですが、去年は雪が多かったです。）厳しい冬の中、街には沢山のイルミネーションやツリーが飾られています。正直なところ、エストニアの冬は暗くて寒さが厳しいうえ、私は雪に慣れていないため大変だと思うことも多かったのですが、特にツリーの上に積もった雪の装いや、雪の中のライトアップはより華やかな演

出を生み、日本では体験できない暗闇の中の美しさを感じることができました。

クリスマスの時期は、何か同じ空間を共有する全員が一体となるような感覚を覚えました。そして普段は喋らない隣の人となんだか話したくなるのです。私はそこで沢山の人の温かさに触れました。クリスマスの時期に町が明るくなるのは、ライトアップされた光ではなく、人の温かさが暗くて寒い外に灯のように見えるため、そう見えるのだと感じました。

ちなみに、クリスマスマーケットにはサンタの家があり、サンタクロースと話すことができます。エストニアの周りの人は、誰もサンタを信じていなかったそうですが、小さい頃に憧れていたサンタに実際に会うことができたのはとても良い思い出です。日本が好きだと言ってくれたので、是非会いに訪れてみて下さい。

初めてヨーロッパのクリスマスを体験して、クリスマスはヨーロッパの人々にとって特別なものであることを、日本人である私も感じる事が出来ました。

ですが、エストニアでもロシア正教会のクリスマスである1月にお祝いをする人々もたくさんいます。クリスマスマーケットは1月の初旬まで開かれており、その後は太陽が出る春まで静かで暗い冬が続きます。





с к о р о г о в о р к и ~早口言葉~

岩本 智子

ロシア語を学習されている方はご存知かも知れないが、世界一長い早口言葉はロシアにある。Лигурия という題名がついていて、イタリアの港町を舞台に始まる奇想天外な物語になっている。YouTubeで動画を見つめることができるが、達人だと2分半ぐらいで話す。文章を印刷すると2ページぐらいになる長編早口言葉である。

私達のイローナ先生のオンラインロシア語クラスでは、授業のはじめにскороговорки(=早口言葉)をやる。先生が早口言葉集を配布して下さり、各自宿題として練習し授業の冒頭で発表する。最初に取り組んだのは「Карлу Клара у Карла украла кораллы, а Клара у Карла украла кларнет.」である。意味は「カール君はクララちゃんの家で珊瑚を盗んだ。一方クララちゃんはカール君の家でクラリネットを盗んだ。」という教育的にはいかがなものかという内容だがрとл(英語のRとL)の発音練習に最適である。

скороговорки をはじめたのは2020年4月頃、「コロナ禍」という言葉が生まれ人々の生活が変わり始めたころだった。コンサート等の計画されていた催しが無くなり、更には必要がなければ人と会ってはいけないということになって街が静まり返った。外出は買い物ぐらいである。一駅歩いてちょっと遠いスーパーに行くこともあった。歩いていると暇なのでКарлу Клара...と呟く。コロナでマスクをするようになったのでしゃべりながら歩いても気付かれず遠慮なく練習ができた。それまで私は巻き舌が出来なかった。子どもの時に英語を勉強し始め

たときにも、Rの発音は巻き舌を使うと教わった。友達のなかには「トゥルルル…」と練習しなくてもできる子もいたが、私はどうやったらできるのか皆目わからなかった。声質の問題で私には出来ないんだと思いこんでいた。何十年もそう思っていたが、この度また巻き舌問題にぶつかった。イローナ先生は巻き舌は練習すれば誰でも出来るようになる、とおっしゃる。毎日「カール君がクララちゃんの、、、」を練習したが1ヶ月ぐらいでは変化は現れなかった。しかし、2ヶ月したころにふと「出来た!」と思う瞬間が現れ始めた。そのうち、立っていると出来るが座ると出来ない、という時期があった。いつも歩きながら練習しているからである。オンライン授業では「立って話していいですか」と言ってタブレットを持ち上げて発表していた。そんなことをしているうちに、世の中はWithコロナと言われる頃になり、いつの間にか私は巻き舌が出来るようになっていた。

Лигурия も全員で挑戦した。みんなで意味を確認しながら少しずつ読み進め、最後まで出来たときは達成感があった。一度は全部暗記した。そうしないと歩きながら練習ができなかったからである。

イローナ先生のクラスはコロナ禍を機にオンライン化した。最初は画面越しで授業が出来るのかと心配したが、今では定着している。一時的に先生がベラルーシに帰られた時も授業を続けることが出来たし、現在もリモートワークが継続している受講生にとっても便利である。巻き舌もオンライン授業もやってみれば道が開けた。(常任理事)

イルクーツク州のスリュジャンカ市日本人墓地

セルゲイ・オディネツ

第二次大戦後、バイカル湖の岸にあるスリュジャンカ市に日本人抑留者約1200人が送られて木の伐採や鉄道関係の肉体労働に従事していました。亡くなった51人が市の近くにある山の墓地で今も眠っています。2022年7月にイルクーツク市「兼六園」友好クラブのメンバーによりこの墓地で清掃と墓参が行われました。墓地は今も大切に守られています。収容所の記録をお伝えします。

(「兼六園」友好クラブ事務局長)

— 大祖国戦争の終わりまでに、スリュジャンカは雲母の増産、新しい鉄道支線の建設などを遂行するのに十分な労働力が不足していた。このため、1945年8月23日のソ連国防委員会の決定によりイルクーツク収容所のいくつかの支部がスリュジャンカに配置された。囚人の一人は回想している。「バイカル湖の湖岸のスリュジャンカ駅で私たちが下ろされた時私たちは喜び、これが日本海で、もうすぐ母国に送られると思いました。しかし、水に飛び込むとこの水は淡水でした。このとき、帰還する望みは恐らくもうないと悟りました...」

第13、14、15収容所支部の囚人は雲母鉱山、森林伐採地で作業しており、スリュジャンカ川の右岸の第16支部の囚人達は車両基地と線路の修理に従事していた。1990年代初頭、元捕虜達はS.I. クズネツォフ(歴史家)に、スリュジャンスクの住民がしばしば捕虜にパン、ジャガイモ、刻みたばこを分けたと伝えた。

捕虜の数は約1200人。S.I. クズネツォフは、その記事「スリュジャンカの日本人捕虜」で、ここでの拘留条件は比較的良かったと指摘している。彼らのほとん

どは普通の農民で、満州に行きその後シベリアの捕虜となった。彼らの死因は、結核、肺炎、赤痢、事故など。S.I. クズネツォフは、1997年に発行されたモノグラフ「シベリア捕虜の日本人...」で、ウルントウイ峡谷のスリュジャンカ郊外にある墓地に51人の捕虜が埋葬されていると報告している。日本人墓地の場所は、1940年代後半に作成されたイルクーツク州の内務局の古文書の概略図に示されており、カルタガイ山の斜面の上にあった。

内務省の指示によって捕虜の墓地は整備されており、仏教の儀式に従い座った状態で木箱に埋葬された。墓の上に小さな丘が盛り土され、墓と区画の番号を示す木製の標識が置かれ、日本人自身が埋葬者の名前と姓に署名したところもあり、墓地の周りには防火溝が作られた。1946年末、ソ連と日本の間で日本人の本国送還に関する合意に達し、捕虜は最後の埋葬の日付から判断すると、1948年2月以降に故国に戻ったようだ。

2000年、イルクーツク州の歴史文化遺産保存センターは、「スリュジャンスク地区の歴史的、科学的、芸術的またはその他の文化的価値を示す新たに発見された対象物のリスト」へ歴史的記念碑として「日本人戦争捕虜の埋葬地」を含めた。—

出典：シベリアの歴史文化及び自然遺産：学童の地域間郷土研究会議の資料/イルクーツク州の教育省、イルクーツク州のGAU DO(訳注：追加教育国家自立機関)「子供のための追加教育開発センター」、子供と若者の観光と郷土研究連邦センター、ロシア地理団体のイルクーツク州支部、イルクーツク：子供のための追加教育開発センター2008年



バルザックとロシア/ウクライナ (その1)

畔上 明

「人間喜劇」の総題の下に90編もの作品を精力的に書き続けたフランスの作家オノレ・ド・バルザック (1799 - 1850) は、ロシアの詩人プーシキンとは同年でした。ドストエフスキーにも大きな影響を与え「ウージェニー・グランデ」を露訳したことが作家を志したきっかけとも言われています。

バルザック2歳のときに44歳のベルニー夫人に恋をし深く関わりをもつようになったことを皮切りに、実に様々な女性との関係があったことでも知られ、それがまた彼の小説を豊かなものとしていったのでした。そんななかで、バルザックが生涯をかけて思い続け、十八年間もかかった末にとうとう結婚にこぎつけた女性が、ポーランド系ウクライナ人のエヴェリーナ・ハンスカ夫人 (1804 - 82) です。エヴェリーナ・ジュヴスカは15歳で、当時37歳のウクライナの貴族ヴァンツェスラフ・ハンスキ伯爵と結婚。南ロシアに追放中のプーシキンとは1823年に面識もあったという彼女は、ロシア帝国支配下の小ロシア (ウクライナ) の片田舎で暮らしながらもヨーロッパの文芸を渴望しフランスの新聞を購読、1832年3月初めに、本名も住所も明かすことなくただ「異国の女」と記してバルザックにファン・レターを送ったのでした。その手紙に心惹かれたバルザックはどうにかしてハンスカ夫人に返信をしたためたいと思いながら果たせずにいると、第二信が届きます。その手紙に書かれた夫人の求めに従い便りを受け取った旨を新聞広告で知らせ、それ以降ふたりの間に文通が行なわれるようになったのでした。ハンスカ夫人との手紙のやりとりはバルザックにとっては小説執筆を中断させるほどで、遂にはヨーロッパ旅行中の夫人に会いに出かけるという行為に及びます。

1833年秋スイスのヌーシャテル滞在の夫婦と初めて出会い三人での親交を深め一週間後に別れますが、同年12月から翌年2月までを夫二人でジュネーヴで過ごし、より深い関係をもったことは「忘れ得ぬ日」となったのでした。

その後、1835年5月にウィーンを訪れ夫人と二十日間にわたる日々を共にしますが、そのあとしばらくはフランスとウクライナとの間でのお互いの手紙が行き交うだけの数年が過ぎて行きます。そして、1842年1月5日の手紙で前年の11月に夫のハンスキ氏が亡くなったことを知るや夫人との結婚を意識し始め、いよいよ1843年に初めてロシアへと足を伸ばすことになります。

当時ロシアの首都に滞在していたハンスカ夫人に一刻も早く会いに出かけたいというバルザックの思いは募るばかりでしたが旅費が工面できず、そんな時にフランツ・リストがサンクト・ペテルブルクへ演奏旅行に出かけることを知るなり、すかさずリストに対して、ハンスカ夫人のもとを訪ねて行って演奏をしてあげてほしいと頼むのでした。リストがなかなかのプレイボーイで女性を誘惑するのに長けているところまでバルザックは頭が回らず、いとおいしい人に対する無防備な心尽くしが、かえって盲目的ともいえる一途な気持ちをよく示す逸話です。バルザックはようやく7月18日になってパリを出発、7月21日ダンケルクからサンクト・ペテルブルク行きの船「デヴォンシャー号」に乗り7月29日にロシア到着、八年振りの再会を果たします。バルザックのサンクト・ペテルブルクでの滞在は二ヶ月を超えますが、その間9月14日には遂に結婚申し込みをしたのでした。

「ロシアホテル」の元日本人従業員が明治初期の函館にもたらした西洋文化

倉田 有佳

幕末開港期の函館には、ピョートル・アレクセーエフ (1832 - 1872年) というロシア人が開いた「ロシアホテル」があった。そこは「大町 築島」と呼ばれ、外国商人のための蔵地 (倉庫用に2000坪) として造成された場所だった。「ニコラエフスク」と呼ばれたホテルは、自宅も兼ねた。ロシア料理や酒類が提供され、函館に寄港するロシア海軍の将兵で賑わった。ビリヤードを楽しむロシア人の姿も見られた。

主人のピョートルは1872年10月に東京で病死するが、「ロシアホテル」は妻ソフィアが日本人を雇いながら続けられた。その頃に「下僕」として雇われていた藤田幸八が、1879年9月、「ヒョトロ (ママ) 代留主居」としてパンと甘い砂糖パンを続ける旨の新聞広告を出した。

「ロシアホテル」の土地は、翌1880年にイギリス人商人ポーターに正式に譲渡された。同年6月、築島から市街地へと場所は変わるが、これまで同様、西洋粉で作った食パン・日本粉で作ったパン・砂糖入パンほかパン菓子の注文販売を続けた。

翌1881年、さらに別の場所へと移り、「洋幸堂の柴田幸八」(藤田から柴田に改姓) として、今度は日本人向けの菓子パンを主軸に小売り販売を始める。

ところで、明治初年頃までは、函館在留外国人や函館に寄港する外国軍艦にパンを納めていたのは、上述のピョートルとフランス人のメナード (Menard) だった。1872年に常陸

国 (現茨木県) から函館に渡ってきた中村作兵衛は、パンから得られる利益をみすみす外国人に独占させてはならないとの思いから、日本人が良質のパンを作ることを目指し、「東洋堂」を開いた。当初は苦戦するも努力を重ね、各国軍艦 (中心は函館に長期逗留するイギリスの東洋艦隊) へ食パンを売り込むようになる。

柴田の方は、入港数では及ばなかったが、ロシア軍艦への食パン納入を独占し続けたようで、1887年7月には食パン5060斤をフリゲート艦「ドミートリ・ドンスコイ」号ほか二隻に納めた労に対し、艦長から褒状を授かり、また1889年6月にはアナディール河口に向かう軍艦へパン1250斤を売り込んだことが新聞で明らかにされている。

幕末開港期の函館で生まれ育った柴田は、進取の気性に富み、「洋語」も解した。次なる商機をビリヤードに見出した。1882年8月に洋食店の傍に「玉つき」を開業することを伝える新聞広告 (画像) によると、ターゲットは外国人と日本人の両方。4年前にロシア人が開いたビリヤード場がほとんどして廃業したため、東京や他の港町では洋食店などには必ず設置されているビリヤードが無い。「繁華なる本港に似合しからぬ欠事」と柴田は考え、開業を決意した。さらに9年後、自ら西洋料理店「滋養軒」を開き、店内に「玉つき場」を新設した (1891年9月)。なお、柴田に玉突きの手ほどきをしたのはピョートルで、道具一式は、「ロシアホテル」で使われていたものだったという。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)



『函館新聞』1882年7月29日。